

【まるこい大阪弁】

「お天道（てんとう）さん、おはようさん」「お豆さん、炊いたんか」「今日はええお月さんやなあ」

大阪では、自然や食べ物でも呼び捨てにはしません。豆は「お豆さん」で、月は「お月さん」。

「お豆さん、ひとつもろてもええか。やらこ～て、おいしいなあ」なんて言われると、心がほんわりとしてくるのではないですか。「お豆さん」という表現がなんとも言えません。それだけで、ふんわりした、ふくよかな豆が目に見えます。「ああ、豆ごはんにして食べたいなあ」と、大阪人は思うのです。

朝のあいさつも「おはようさん」で朝日を拝んでは「お天道さん、ごきげんさん」

また、「お疲れさん」「おまつとうさん。」と声もかけます。

このように、いろいろなものを擬人化するのは、大阪弁の特色で、あわせて、単語の頭に「お」を、最後は「さん」をつけて呼ぶ「お〇〇さん」の法則があります。

大阪弁は「やさしい街です」を「やさしい街ですやん」と言います。最後の「やん」にみられる「ん」が大阪弁の特色で、これが大阪弁を「まるこ～」にし、「やらこ～」にしているのです。

「あんたも、一緒に行くんか。どうすんねん。だいぶ待つとるんやでえ。ついて来るんやったら、ちゃあんと履きもん履かな」ほな、行こか。

道で地図をのぞき込む人がいれば、「どないしはってん？」と聞きに行きます。

道順を教えるだけでは満足せずに、「そこやったら、わても行くところや、ついて行つたわ」と。

電車の中で咳をした人がいれば、バッグの中から飴を取り出し「飴ちゃん、どない？」おばちゃんと言われる人は、ほとんどバッグの中に飴が入っています。人にあげるために、ひと袋よぶんに持ち歩いているおばちゃんもいるほどです。

「まるこ～て、やらこい」大阪弁は人との距離を近づけます。

「いや～、きちんと食べてはるやん。えらいわあ」

「しんどかったら、無理せんでもええんですよ」

「もうちょっとやから、気張ってやりましようなあ」

「それ、めっちゃ似合ってますやん（におてますやん）」

「そんなんしたら危ないから、ほんま、気をつけてや」

「なあ、ちゃんとやれますやん。もう大丈夫やわ」

「それはそこと、ちゃうんとちゃうの？こっちゃんに置いといてえ」

「元気出して、ぼちぼち行きまひよか」

「ほな、さいなら」